

7月の行事報告 July



壮年会法座 7月3日(土) 午後3時

7月3日(土)の午後3時より壮年会が行われました。まずは、本堂にて新しく入られた児島さんの入会式が行われ、前住職より門徒式章が授与されました。そのあとに、正信偈・和讃・回向のお勤めを行いました。そして、住職より阿弥陀経解説3回目が行われました。

1回目は、仏説阿弥陀経について、どこで編纂され成立したか、そして、阿弥陀経の特色、編纂者、構成について。2回目は、構成の中の序分について解説をいただきました。

今回の3回目は、本論で教説の中心である正宗分しょうしゅうぶんについて解説をいただきました。

私は、小さい頃に、仏壇の前で祖母が毎日、正信偈をあげていて、その横でなんとなく聞いていた記憶があります。ですので、正信偈については思い出があるのですが、阿弥陀経に関しては、祖父・祖母の法要で唱えていたなあという記憶しかなく、法要では、和讃の方が思い出深くなっており、阿弥陀経の印象が薄いものでした。



しかし、今回の正宗分の始めの方の内容で、極楽浄土とはどのようなものを音楽としては味わえなかったもの、このように意味を知ることにより味わうことができたのが驚きでした。

人の生き方によって、味わい方は人それぞれで、音楽で味わえることもあれば、意味で味わうこともあり、違う感じ方で味わうこともあるのだなあと考えさせられました。

年を重ねることにより、どのように味わうことができるか楽しみです。また、次回の壮年会でこの続きを教えてください、いろんな味わい方を勉強できればと思っております。

(光本 浩昭 記)

11月の行事報告 November



今年も報恩講に逢えました

【宗祖親鸞聖人報恩講法要】 お逮夜法要:11月20日(土)午後2時・お満座法要:21日(日)午後1時

毎年報恩講を迎える頃になると、今年も残り少なくなったなあと思うと共に、1年を振り返る時節でもあります。

今年も浄土真宗にとって最も大切な法要とされる報恩講が、11月20日(土)、21日(日)に行なわれました。

20日のお逮夜法要は、コロナ禍により昨年と同じく午後2時から勤行されました。最初は、ご住職の独特の節回しであげる「初夜礼讃」のお勤め、次に仏教讃歌「しんらんさま」、そのあと堂内の灯りを消して前住職による御伝鈔拝読。

上巻第七段「信心しんしん浄論じょうろん」(法然上人の信心と善信房“親鸞”の信心は同じだと言ったことから大勢のお弟子達と大論争になったはなし)と下巻六段「洛陽遷化(親鸞聖人ご往生の様子)」です。

初夜礼讃と御伝鈔は報恩講ならではの特別な雰囲気を感じます。

翌21日午前中は、予てより第二墓地駐車場に建設中の個別合同墓(法縁廟と命名)が完成し、門信徒会役員が参列して建碑法要が行なわれました。少子高齢化問題や家族のつながり等の状況の変化により、お墓や納骨に対する考え方も多様化していく中、今後合同墓は必要な施設として共用されてゆくことでしょう。

午後1時からのお満座法要は、正信偈のお勤め、仏教讃歌「報恩講のうた」、ご法話は昨年に続き山崎龍明師で、「私が私にであう集い」の講題でお話し頂きました。その中で記憶に残る報恩講にちなんだ句がありました。

◆百姓は 野良着のままや 報恩講

◆堂の扉に めしいの杖や 報恩講

こうした情景のなか、何百年もの間、親鸞聖人の教えが“なんまんだぶつ”となって、日常の中に根付いてゆき、信仰と共に生きた人々の生活が偲ばれます。

合掌 (福島 道宏 記)



感話 シリーズ-32

阿満 利磨先生/秋季彼岸会ご法話のご縁から……

「彼岸会法要—阿満 利磨さんのお話」

9月23日(木)秋分の日 午後1時



彼岸会法要に、阿満利磨さんが話されました。昔、前住職や壮年会のお仲間と、文化講演会の講師のお願いで、八重洲国際ホテルのロビーに初めて会いに行ったのが思い出されました。阿満さんの本も読んでいったのですが、文章・内容など難しくどんな人なのかと緊張していました。それまではNHKのディレクターだった印象が強かったのですが、その時には宗教の本を出されている学者的な感じが強くなりました。

偶然NHKの教育テレビで放送された阿満さんの作られた2時間くらいの番組「自分とはなにか—生命哲学の問いかけるもの」を拝見していました。細胞が自分から死んでいくアポトーシスの自己免疫にかんする多田富雄先生の話や、今ではAIの父と呼ばれているマービン・ミンスキーの人工知能の話、そして一部金持ち・研究者のために死後の脳を保存する、保冷倉庫の実態なども含まれていて、かなり衝撃を受けていました。

大学の先生をされ、「連続無窮の会」を立ち上げられ、中原寺にも何度か見えられていました。宗教学者ではあるのですが、一求道者の立場にたたれており、僧侶でもなくいわゆるインテリとして、お寺のお説教らしくない道理ある教え(ご本人いわく)を説く姿勢に、一信徒として尊敬してまいりました。

今回は『なぜ ただ「念仏」なのか』という直球みたいなお話で情熱が感じられました。内容的にはこれまで述べてきている法然・親鸞に基づく見解でしたが、改めて念仏を称えることが大切なものだと思わせていただきました。

ただ念仏することが悟りの境地に導くということは、簡単すぎてインテリはなかなか理解できない。関東の弟子たちも、ほかに何かあるのではないかと納得できずに何度も親鸞に証をもとめたが、親鸞は「ただよき人のおうせ」としかのべなかった。では「よき人」に会えなかった人はどうすればよいのか。

「南無阿弥陀仏」と言葉として称えるときだけ阿弥陀仏は存在し、称えることで阿弥陀仏は存在し、称えることで阿弥陀仏とつながりができ、浄土の境地に導かれということだ。また人の心には仏になりたいという潜在意識があるはずで、知らず知らず称えることにより自然と阿弥陀仏の心が自分の心のうちにしみとおってくる。たとえば鬼みただった人が念仏を称えていたら、何年かのちには穏やかな顔になっていたということもあるだろう。

人の世は不条理なものであり、理屈ではどうにもならぬことが多いものだ。ゆえに意識とは別の物語が必要であり、法然は疑いながらの念仏でも往生すると説かれ、兼好法師は徒然草第39段で、それはすごいことだと述べている。悟りをひらくとは六道輪廻を断ち切るということであり、輪廻の輪を断ち切り浄土に行くということは、犬、猫ではできないことだ。

以上のように述べられ、人間にだけ可能性が残されているわけで、いつまた人間界に生まれるかわからず、もう人生残り少ない人が多いが、今生の貴重な機会を大切にしてください、と言われました。合掌 (越田修一郎 記)

